

平成 24 年 3 月 14 日

平成 23 年度 大学院の教育・研究等に関するアンケート結果の総括

福山大学 大学院・学術研究委員会  
委員長〈学長〉 松田 文子  
担当委員 里内 清

大学院生を対象に大学院の教育・研究等に関するアンケート調査を実施し、本学における大学院教育の点検の資料として、アンケート集計結果を総括したので報告する。

◇実施期間：平成 23 年 12 月 1 日より 12 月 16 日までの間に行った。

◇調査対象：本学大学院在籍学生、経済学研究科 12 名、人間科学研究科 16 名、工学研究科 35 名、薬学研究科 1 名の 64 名のうち、回答者は経済学研究科 10 名、人間科学研究科 12 名、工学研究科 28 名、薬学研究科 1 名の計 51 名であった。

◇設問項目：前年度に実施した大学院授業評価アンケートに準じた。

◇結果のまとめ

I 大学院入学の目的について（質問 1）

大学院入学の目的については経済学研究科や人間科学研究科では、「専門分野の知識を深めたい」や「資格を取得したい」を目的とする学生の割合が多数を占めた。一方、工学研究科では「専門分野の知識を深めたい」に加えて「研究を深めたい」が大学院入学の主目的で 80%以上を占めていた。なお薬学研究科は 6 年制への移行期に当たり、博士後期課程 2 年生 1 名が対象で「専門分野の知識を深めたい」および「研究を深めたい」を選択していた。「就職に有利である」と考えている学生の割合は全体の 5%であった。工学研究科と薬学研究科の学生は研究や専門分野の知識を深めるために入学し、経済学研究科と人間科学研究科の学生は専門知識の深化に加えて資格を取得するために入学していることが明らかとなった。

これらの結果は、大学院入学の目的に対する意識が文系と理系の学生で異なることを示しており、昨年のアンケート結果と全く同じ結果である。

II 大学院の授業について（質問 2～質問 7）

研究科の授業科目のシラバスの構成（質問 2）と内容（質問 3）については、それぞれ

86%、および90%の学生が「強くそう思う」又は「だいたいそう思う」と回答しており、学生が期待する授業であると判断される。しかしながら、「あまり思わない」又は「まったくそう思わない」とする学生が4～10%いることも判った。なお授業回数（質問4）や授業時間（質問5）については、それぞれ98%と96%の学生が規則通りに実施されていると評価している。また、授業内容のレベル（質問6）と授業方法（質問7）についても、それぞれ84%と86%の学生が満足していることが明らかとなった

この結果も昨年のアンケート結果と比べ数%満足度が増えた程度で、ほぼ同じ結果であった。

### Ⅲ 研究指導ならびに研究状況について（質問8～質問12）

研究テーマの決定（質問8）については、88%の学生が適切であると判断している。指導教員の熱意（質問9）と指導の適切さ（質問10）については、いずれも約88%の学生が満足している。一方、研究の進捗状況（質問11）については、56%の学生が「順調に進んでいる」と回答しているものの、30%の学生が「どちらとも言えない」、14%の学生が「あまりそう思わない」若しくは「まったくそう思わない」と回答し、研究の進展に苦労している学生がいた。これらの結果は、全学生の総計であるが、学年毎に精査した昨年結果では、M1よりM2の方が「順調に進んでいる」という回答は多く、「どちらとも言えない」という回答はM1に多かった。このことは、M1が研究の途上であり、M2が論文作成の直前の時期にアンケートを実施したことと起因すると考えられるが、今回の調査では研究の進捗状況に不安を抱える学生が昨年より増えており、研究指導体制の徹底が必要と考えられた。問題発見能力向上（質問12）については、64%の学生が大学院で学ぶことにより向上したと感じている。「あまりそう思わない」および「まったくそう思わない」学生は6%であり、多くの学生が大学院進学で資質の向上を実感していると考えられる。

### Ⅳ 研究環境について（質問13～質問18）

研究に必要な施設や設備（質問13）については、60%の学生が整備されていると回答している一方で、16%の学生が不十分であると考えている。これは研究テーマにより施設・設備の遅れている面があると考えざるを得ず、精査して改善すべき今後の課題である。

図書館の蔵書（質問14）及び利用しやすさ（質問15）については、それぞれ満足している学生の割合が52%と56%であり、満足していない学生が半数近くいること、また自由記述でも不満を述べる意見が複数あることを考えれば、今後の改善が強く求められる。学生図書費のより適切な活用方法も考える必要がある。

大学院生の経済環境については、奨学金等（質問16）の第三者による支援については72%の学生が十分と考えているが、大学による支援（質問17）については、十分と考えている学生は42%にとどまり、24%の学生は十分ではないと考えている。ティーチングアシスタント制度については、約78%の学生が自分にプラスになっていると考えているが、

「どちらとも思えない」を含めあまりこの制度の効果に肯定的でない学生もあり、今後この制度の運用を検討していく必要があることを示している。

## V その他（質問 19・質問 20）

研究室での日常生活や人間関係において、苦勞を感じていないという回答が 44%、感じているという回答が 34%であった。苦勞を感じている学生の割合が昨年よりも増加してことから、相談窓口などの充実に加えて、指導体制の見直しなどの対応をしていく必要がある。また、大学院での教育・研究に対する総合的な満足（質問 20）では 76%が満足していると回答している。しかしながら、そう思わないと評価する回答が 6%程度存在している。また、自由記述欄には、様々な要望が記載されているが、これらについては個別に検討し、学生の要望に応える改善をしていく必要がある。

### ◇結果の考察

大学院授業のシラバスや回数など、その運用については、概ね満足度が高いが、一部に大学院講義の内容やレベルに不満を持つ学生もいる。研究テーマ設定や指導に関しても満足度が高いようであるが、一部に強い不満を持つ学生が存在する。研究の進捗状況については、どちらかというと言心している学生が多いと思われるが、これは必ずしも悪いことではない。逆に、研究面での苦勞が成長と結びついている面が大きい。

研究環境については、設備面で著しい不満を持つ学生がいないのに対して、図書・雑誌、図書館に関しては評価がバラバラで、この面での研究環境に不満を持つ学生の比率が高い。ひとつの対策として専門雑誌に関しては、eジャーナル化が望ましい。奨学金制度の整備状況には満足しているが、大学による経済的支援について不満が多いのは、学会参加に対する大学の経済的援助がないことを指していると考えられる。また、研究室内での人間関係に悩んでいながらも、大学院の教育・研究指導には総合的に満足している。また、国公立大学に比べて国際交流が少ないこと、パソコンが古いこと、人間関係が煩わしいこと、教員が忙しくて相談に乗ってもらえないこと、将来の就職への不安などが個別に挙がっている。

今後の対策として大学院の講義については、専門性の高い内容の講義を行うことも重要であるが、専門外の学生も受講することを考えて、幅広い層の学生が興味を持てるようイントロダクションや背景説明、専門分野と社会との関わり等について十分説明する必要がある。また社会や社会的ニーズの変化に併せて、講義内容をリファインする必要がある。

研究テーマの設定や研究指導、進路相談については、忙しいスケジュールの中で優先順位を上げ、学生と十分話しあって進める必要がある。大学院生が社会との接点を持ち、研究発表などを行うことは学生・大学双方にとってメリットがある。そこで、ある一定の基準を満たすことを条件に、学会活動など学外活動に対する経費を支援する仕組みを作れば、

学生へのインセンティブになる。学会発表以外にも、学生が主体となる社会貢献活動に対する支援も有効と考えられる。

大学院生への対応についてはコミュニケーションギャップによって研究室内の人間関係などの問題が顕在化することがあるので、日頃から十分に話し合う時間を取ることが重要だと思われる。また指導教官と学生が1対1で相対する状況では人間関係がこじれ、アカハラ、パワハラ、セクハラになりかねないので、なるべく多くの教員、学生、職員、その他社会人と話す機会を設けることが肝心だと考えられる。

その他として、海外からの留学生は学生の刺激になり、外国人とのコミュニケーションをとる動機付けになるので、外国人留学生がいるのが望ましい。また大学院に限らないが、教員、学生が気軽にくつろいで話ができるアメニティースペースの整備が急務である。

なお学生へのフィードバックは平成24年2月に研究科毎に実施された。

以上